

## 答弁書

特許庁審査官 近藤 裕之 殿

1. 國際出願の表示 PCT／JP2004／012060

2. 出願人

名 称 ダイキン工業株式会社

DAIKIN INDUSTRIES, LTD.

あて名 〒530-8323 日本国大阪府大阪市北区  
中崎西2丁目4番12号 梅田センタービルUmeda Center Building, 4-12,  
Nakazaki-Nishi 2-Chome, Kita-ku,  
Osaka-shi, Osaka 530-8323 Japan

国 稷 日本国 Japan

住 所 日本国 Japan

3. 代理人

氏 名 (9414) 弁理士 小野 由己男

ONO, Yukio

あて名 〒530-0054 日本国大阪府大阪市北区  
南森町1丁目4番19号 サウスホレストビルSouth Forest Bldg., 1-4-19,  
Minamimori-machi, Kita-ku, Osaka-shi,  
Osaka 530-0054 Japan

4. 通知の日付 19.10.2004

5. 答弁の内容

本願発明は、引用発明とは明らかに異なるものであり、当業者といえども引用発明に基づいて容易に相当できるものではなく、本願発明は特許性を有するものであると考えています。以下、その理由をご説明します。

(1) 請求項に係る発明の内容

本願の独立項である請求項1および請求項6を以下に示します。

[請求項1]

少なくとも特定部(240, 241)が、輝度のある粒子(45, 48)が混入された透明な材料によって形成されるケーシング(4)と、色彩又は模様が表され、前記特定部(240, 241)の裏側に設けられる意匠層(43, 46)と、を備える空気調和機(1)の室内機(2)。

[請求項6]

ケーシング(4)の少なくとも特定部(240, 241)が、輝度のある粒子(45, 48)が混入された透明な材料から形成される第1工程(S14, 16)と、

色彩又は模様が表された意匠層(43, 46)が、前記特定部(240, 241)の裏側に施される第2工程(S15, 17)と、を備える空気調和機(1)の室内機(2)の製造方法。

(2) 本願の請求項にかかる発明と引用文献との比較

引用文献1(JP2003-014249)には、吸入パネルが設けられた室内機が開示されています。吸入パネルは、吸込口が設けられたフロントパネルの前方に設けられ、吸込口を開閉するパネルです。室内機の運転開始時には吸入パネルが回転して吸込口が開かれ、室内機の運転停止時には吸入パネルが逆に回転して吸込口を閉じます。

この吸入パネルは、補助プレートを設けることによって外観を向上させることができると記載されており、補助プレートは2重部材または単一部材とされてもよいことが記載されています。このうち2重部材は、透明な第1層の背面に金属薄膜などの第2層を設けたものであり、第1層に光を透過させて第2層で光りを反射させます。また、第2層が所定のカラーで彩られてもよいことも記載されており、本願の「透明な材料」と「意匠層」とに含まれる内容となっています。

しかし、引用文献1には輝度のある粒子を混入させる記載はなく、審査官殿は、国際調査機関の見解書において、引用文献1の単一部材に関する記載から導きだせる事項であると述べています。恐らく、引用文献1には、単一部材の補助プレートが多様な模様およびカラーを包含できることが記載されており、審査官殿は、これらに基づいて輝度のある粒子を混入することが導き出せるという認識に至ったのであろうと思います。

しかし、「単一部材の補助パネルに多様な模様およびカラーを包含できる」ことは、粒子の混入に対する示唆とは到底なり得るものではありません。その理由を以下に説明します。

本願の輝度のある粒子を混入させるメリットは、背面の意匠層に輝度を加えることができる効果と、そのために層を追加するための工程を省略できる効果の2つの効果があります。従来の空気調和機の室内機では、前者の効果を得ようとすると工程が増加し、後者の効果を得ようとすると背面の意匠層に輝度を加えることができません。これら相矛盾する2つの効果を同時に得ることができるようにならなければなりません。ここで、前者の効果を得ようとすると必然的に背面の意匠層が外観上に現

れることが必要となります。また、後者の効果を得るためにには、粒子の層を設けるのではなく、「透明材への混入」が必要となります。

これに対して、引用文献1の「単一部材」とは、補助プレートそのものが模様やカラーを有するものであると考えられます。単一部材の場合は、敢えて2重部材と区別していることから明らかのように、裏側に意匠層が設けられるものではありません。また、このため、単一部材を透明材で形成することは考え難いと思われます。意匠層が存在しないのに透明材によって補助プレートを形成すると、意匠層のない背面が丸見えになるからです。

上述したように、本願では、粒子の混入は透明材に行われる事が重要であり、単一部材が透明でなければ粒子を混入させることは意味をなしません。従って、上記の単一部材に関する記載は、輝度のある粒子を混入することの示唆となるものではありません。

また、「2重部材」については、第1層に輝度のある粒子を混入する旨の記載はなく、第2層にカラーを施すことが記載されているだけであり、別途層を設けることによって意匠を表すことが記載されているだけです。これは、本願で従来技術としている技術であり、本願のように、別途層を設けることによる製造工程の増大を抑えるという課題に反するものです。

### (3) 結論

以上より、本願発明は引用文献1から容易に得られるものではありません。よって、本願発明における特許性をご再考頂きますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

以上